

「転換サイン」は売買シグナルとして でなく、「放れ」の確認に使う

相 場の変化には 必ず現れる波形がある

野線の転換サインは近年では売買シグナル、あるいは売買決定サインという受け取られる方が極めて強いと言えます。

しかしながらこの一目均衡表講座で述べきましたように、野線本来の目的は「値動きに惑わされぬために」ということが第一であってその延長線上に「転換サイン」があるのです。

値動きに惑わされぬために古来相場の世界では「押し」「戻り」という言葉を使って「下げ」「上げ」と分けて考えました。

自らの想定で「押しの限界はいくら」と決めておき、その範囲内での反発は上げ、限界を超えて下がってきた時には明確に下げを判断するわけで、いわば「判断保留の状態」をつくるのです。

この自ら想定した「押しの限界」での現れを確認するための工夫がさまざまな野線を生み出してきたと言えるでしょう。

さて「自ら想定する」ということは、判断の客觀性に問題が生じることになりますが、自らの思考順序と判断方法が明確である限りにおいては、決して「客觀的正しさ」が問題ではありません。

実際のところ売買決定サインに反して相場

が動かない、あるいは反対に動くこともあります。その動き自体が大きなチャンスにつながるのですが、上げと下げが交互に起こり、その都度「転換サイン」が明確に現れる、という考え方を固定化している人は判断を誤り、利益につなげることは出来ないでしょう。

野線の「転換サイン」は売買シグナルとして固定化するよりも相場の「放れ」を確認するものとして扱う方が良いのであります。

そこで今回は「転換サイン」の考え方についてコメントします。

一目均衡表に限らず、野線の転換サインについては、ただいたずらにそのパターンに注目するのみで、本質的問題に触れないものも多く、目に余るものも少なくありません。

上げ相場は安値、高値を切り上げ、下げ相場は高値、安値を切り下げる(図1)(図2)。

このこと自体は、誰が、どのように相場変動を考えようとも正しい、と言えます。

また相場の転換は上げ相場から下げ相場への変化、下げ相場から上げ相場への変化なので、何度も説明しているように、次の波形が必ず現れることになります(図3)。単純に考えまして、野線の転換サインのほとんどは図3の考え方を含むのですが、波動変遷を含めて考えた方が良いでしょう。

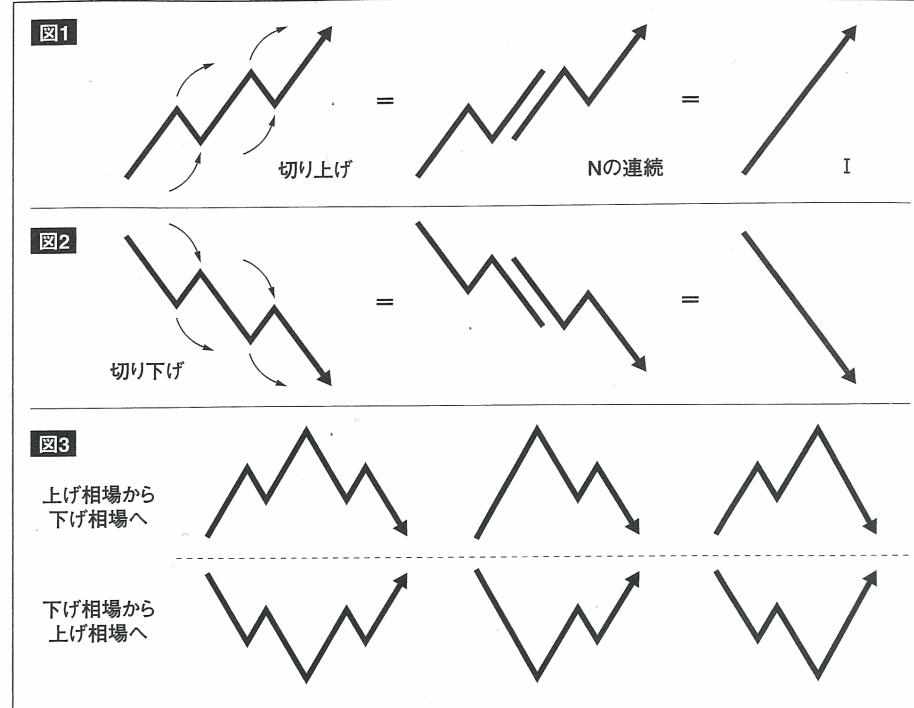


図1を御覧下さい。これは安値、および高値を切り上げる波形ですが、一目均衡表の波動論ではこれを上げのI(一波動)、もしくはN(三波動)、もしくはNの連続として捉えます。下げ場合も同様であります、図2のように、それぞれI、N、Nの連続として扱います。

このように抽象的に扱うのには理由があります。まず、一点は全体相場の方向性が求められ必要だからです。この判断は「上げ」か「下げか」の明確な方向なのです。

その判断の前提として単なる値動きを相場の方向として捉えないようにするために、あえて三波動目を相場の方向として捉えます。

相場が方向性を変えない限りは、三波動は連続し続けるはずですから、三波動の連続が

否定された時こそ、相場の転換の可能性を判断しうるポイントとなるわけで、これは具体性をもたせるよりも抽象的に単純化されていた方が良いのです。

図3の波形はそのまま鍵足での転換サインとして知られます。また高値更新で上げを判断し、安値更新で下げを判断する新値足もまた同様の捉え方をしていると言って良いでしょう。

鍵足や新値足は近年ではあまり人気がないようですが、酒田五法として知られるローソク足での転換サインは、一種のパターン分析として広く活用されているようです。

色々と複雑な組み合わせもあるようですが、最も単純な包み足(図4)を見てみましょう。



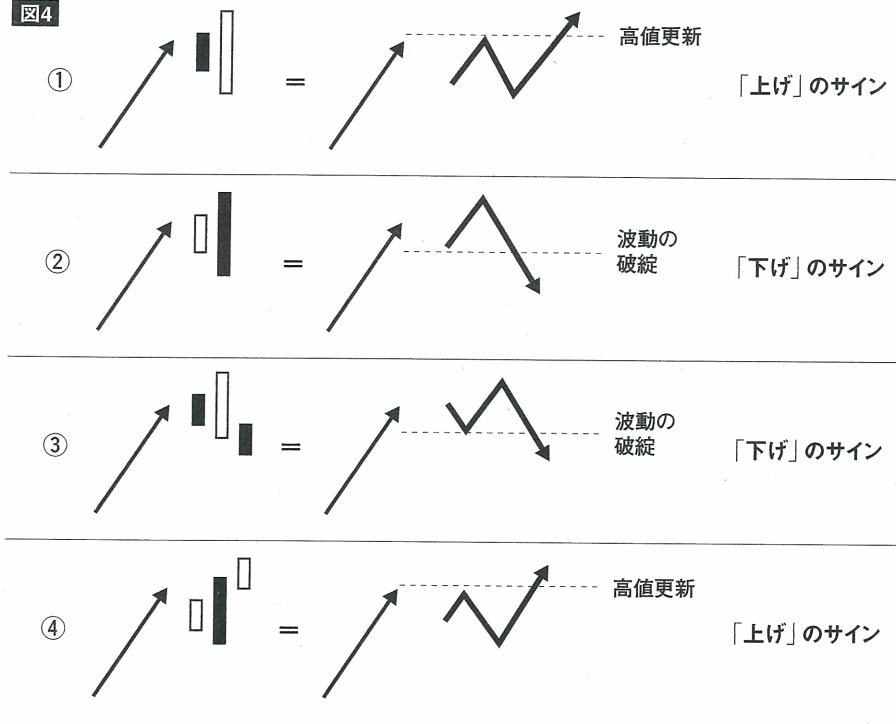
正しい相場観を維持することで有効活用できる

一般的に①は上げを、②は下げを示唆するものとなります。ですが波形として捉え直せばそのまま図3の転換サインとなります。

とはいってもこのローソク足の形状は次の足の形と位置を保証するものではありません。①は場合によっては③のように下げを示唆するものに変わり、②は④のように上げを示唆するものに変わりかねないのです。

従ってあまりこのような形状のみ具体的に理解することが売買の成功に結び付くのはまれでして、型として固定化すべきではありません。

図4



もう一つ十字線を例としましょう(図5)。ローソク足自体はある期間の変動を記号化したものですから、どの足も二つの波形を考えねばならないので、私は次のように分けて考えます。

上げてきた相場で十字線が出た場合、①ならば下げを直感し、②ならば上げを直感すべきと、言えます。これは単なる傾向で、次の足の出現位置によって判断は変えるべきです。同時線から上下いずれへ放れるという考え方ですが、同時線の出現時に評価すべきは落に対する騰の勢い、騰に対する落の勢いなのです。下髭や上髭なども、結局のところ戻りの勢い、下げの勢いを評価しているに過ぎぬこ

とを理解すべきでしょう。

図1から図3を今一度、御覧下さい。相場の転換は上げた相場が下げる、下げる相場が上げる、ということでありまして、図3のいずれかの波形は相場の転換時に必ず確認出来ます。

従って、この波形で相場を直感的に判断することは決して間違ひではありません。

しかし、この波形の出現がその後の方向を保証するものでないことは、ローソク足の転換サインでも明らかです。

必ず騙しにあうか、騙しの少ないものであれば値幅を取れずということになります。結局のところ正しい相場観を維持することしか有効に活用することは出来ないでしょう。それ故に相場の時間関係や、計算値による把握が必要ですが、次のような活用に限定すれば、必ずしも相場観が正しい必要もないのです。

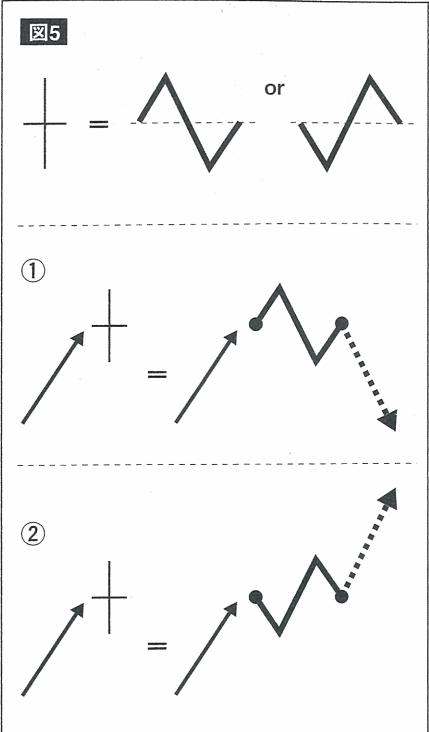
現在相場は下げている。しかし自分は上げると考え買う用意がある。

そういう場合に直ちに買うのではなく、必ず現れる波形を確認してから買う。

というように相場の入り口としての活用に限定するならば、後日、必ず問題点が整理されてくるでしょう。

極端に整理すれば、野線の転換サインは「モミアイ」での高値を上抜くか、安値を下抜くか、そのことのみ判断しているのです(移動平均線の乖離率を使うものは、また別と言えるでしょうが)。そして一目均衡表はその間の半値部分、モミアイでの相場水準を典型的な放れとして受け取っているのであり、決して難しいことではありません。

図5



次回は、いくつか具体的に相場の放れについてコメントするつもりです。

相場の位置と、時間関係によって放れを放れと見なせない場合もあります。また、的確に動き出す瞬間をつかめる場合もあるのです。決して同じ相場はありません。

さて個人的なお知らせを。2月より有料メールマガジンを配信中ですが、個別銘柄の悪化に伴い、竹内先生の銘柄紹介は期限を決めず延期しております。

相場が良くなってきたら、配信出来るかと思いますが、当面、私の野線講座、相場コメントのみの配信となります。ご了承ください。

■ファックス版のサンプルをご希望の方は0423-96-4383(株)経済変動総研まで申し込みください。

基本三波動Nの時間関係から相場の方向性を読む事が重要

モミアイ相場としての特徴を正しく理解する

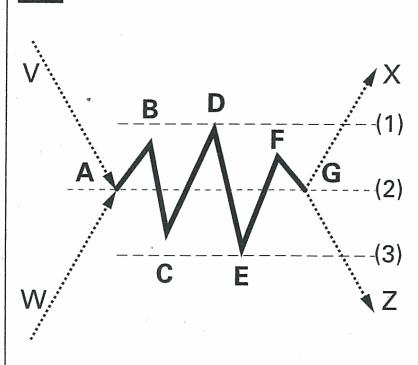
モミアイ相場の現れ方には次の1、2のような特徴が見られます。

図1は(2)を中心値(相場水準)としたモミアイの略図です。

相場水準(2)の値段を始めてつけたAのポイントからの日数は基本数値において極めて特徴的な現れ方を見せます。

- 1、Aからの基本数値でB、D、Fがモミアイでの高値に、あるいはC、Eが安値になる。
- 2、Aからの基本数値ではAと同水準(2)の値段を通過しやすい。

図1



野線分析ではGから(1)を上抜くことで上放れを、Gから(3)を下抜くことで下放れを確認し、これを転換サインとする事が一般的です。

これは理にかなった事でありまして、WからA Gのモミアイを経て(1)の値段を上抜くまではD Eが押しである事は客観的に証明されないのです。

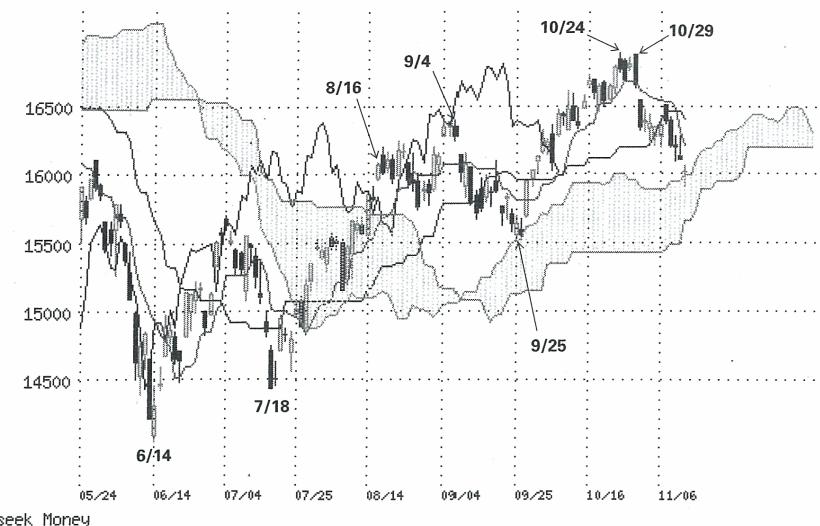
同様にVからA Gのモミアイを経て(3)を割込むまではE Fが戻りである事も客観的には証明されません。

一目均衡表でもこのようなポイントはもちろん重要視するのですが、均衡表の最大の特徴は、モミアイでの相場水準(2)を放れの最も重要なポイントとして捉えている事です。

特に図のEからFで(2)を一端超えて、Gで押しを入れたうえでXに至るような放れ(相場水準を踏み台とした放れ)こそ典型的な放れと捉えるのですが、そうでない場合もE F G Zのように、この水準は通過します。

(2)の値段を、通過せずに放れていくモミアイはあり得ないのならば、この水準を重要視する事の意味も領けるでしょう。

図2



繰り返しになりますが、均衡表の各線は基本数値での半値関係を現します。

AからGまでが基本数値となりやすいならば、当然AからGまでの期間の半値は均衡表の位置になりやすいのです。典型的な放れはF G Xのように(2)を一種の踏み台として出発するものである事は、均衡表各線が押し、戻りとして機能しやすく、当然納得のいくことでしょう。

踏み台とせずただ通過するだけの場合もあるために運行スパンを見る必要もあります。

いざれにせよ数ある基本数値の中で26を最も大事にしているわけで、均衡表好転は原則的には26日間をモミアイとした場合の放れという事がいえます。

そこで図1の基本数値での現れ方を実

際に日経平均株価で確認します。

図2を御覧下さい。

6月14日安値から11月13日までの日経平均株価日足均衡表グラフです。

1万6000円に乗せた8月16日を起点におき、この1万6000円を相場水準としたモミアイ相場について考えます。9日目の8月28日は安値、17日目は9月7日で8月16日と同水準、33日目、42日目は9月25日から10月24日までの上昇過程にあります、一端高値から押していますので、モミアイでの高値位置という事がわかります。

結果的に51日目10月27日の陰線から下げて11月13日に8月16日と同水準に戻ったわけで、今後も65日目、76日目などの基本数値が大事であるとわかります。

日経平均株価は結果的に8月16日を相

場水準として、Y波動という中間波動（モミアイ）を形成し、それが放れとならずに相場水準の位置に戻ってきた、という変動であります。

図1に照らして考えてみれば、(1)を上抜いても、(2)を下抜いても、結果的に放れではなかったという事がわかるでしょう。

放れと見なすべきポイントからの上昇幅、下落幅がどれだけ期待出来るか、という事が実際の売買には大切で、それ故に昔の相場師は相場観を大事にしたのですが、一目均衡表では、その事も時間関係から判断します。

三 波動変遷で方向性をつかむことが出来る

つまり、基本三波動Nの時間関係が重要なです。

6月14日安値に至る変動を整理しますと、昨年4月21日安値から10月5日高値までの上昇が113日、10月21日から今年4月7日高値までの上昇日数はこれに見合う114日であり、大きな三波動を形成しています。

4月高値から6月14日までの下落は46日間、4月7日からの114日は既に経過しましたが、今後6月14日までの下落を第二波動と考えた場合、最大で6月14日から $(114 + 46 - 1 =)$ 159という時間が残されています。これは来年になりますが、この大きな時間関係と6月14日安値

を起点とする時間関係との比較において、期待しうる上昇、下落のスパンは変わっていきます。

6月14日からの騰落は15日上昇で7月4日高値、ここから10日間の下落で7月18日安値をつけました。

7月18日から期待しうる上昇日数は最大で $(15 + 10 - 1 =)$ 24日間となり、6月14日からは47日間で、4月7日からの下落日数46日に見合うものです。結果的に6月14日から45日の上昇で8月16日となり、その後のモミアイ相場と捉える事が出来ます。

9月4日高値をつけ、25日安値をつけた後は、中心点が変り、この間の下落を第二波動とした三波動構成がなされるべきですが、結果的には次の三波動構成で10月24日高値となっています。

1、8月7日から9月4日まで21日間の上昇=9月25日から10月24日まで21日間の上昇

2、7月18日から9月4日まで35日間の上昇=9月4日から10月24日まで35日間の上昇

このようにモミアイでも、三波動変遷で方向性が明確になる事を知ることは野線を活用するうえで重要です。

つまり図1で放れのポイントを挙げておますが、それまでの変遷によっては判断はまったく変りうるのです。

今回は慣れていない方には少し難しい解説となっておりますが個別銘柄でもうひとつ例を挙げましょう。

図3は6月14日を安値とするトヨタ自動車の日足グラフです。

5月8日から8月17日までの騰落日数は日経平均とほぼ一致しているのですが、結果的には大きな違いとなって現れました。

この変動に関していえば9月26日が重要な変化日だったのですが、次の日27日に陽線が基準線と転換線を上抜いた事で三波動目を狙うべき放れと見なせるのです。

9月26日は5月8日からの下落日数28日間を重要視すれば、8月17日から28日目で中間波動終了を示唆する変化日であると同時に図1の様に相場水準を考えれば

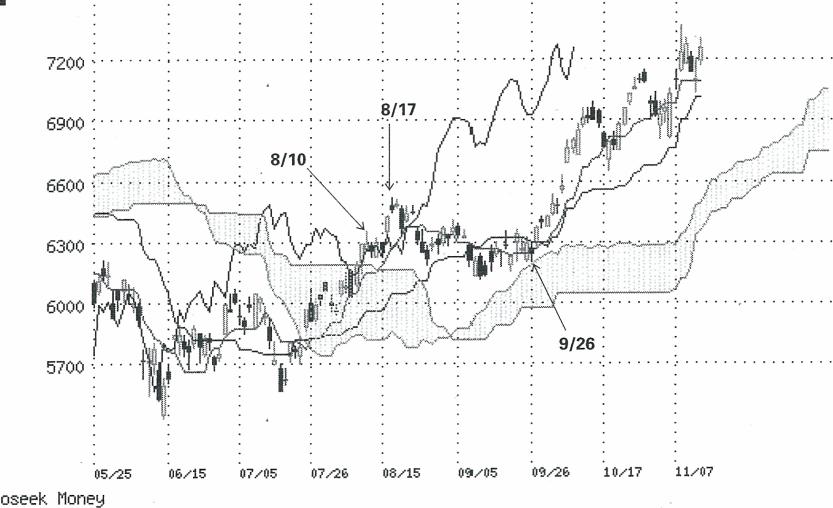
8月10日から基本数値33日目に当たります。

このような変化日からの放れから均衡表が好転し、なお上げの三波動構成の時間が充分残されているならば、やはり上げ相場を期待出来るのであり、このことについてはメールマガジン「一目均衡表俱楽部株式レター」9月配信の4回で詳しく解説いたしました。

トヨタ自動車は日経平均株価の変遷とは異なり、過去からの大きな下落の影響力を考慮する必要がないなど、違いはありますが、基本的な考え方、野線の活用の仕方は同じです。

少し難しい解説となってしまいましたが、次回は改めて、野線の活用意義について整理したいと思います。

図3



相場の直感を養い確証を得ることが売買の重要なポイント

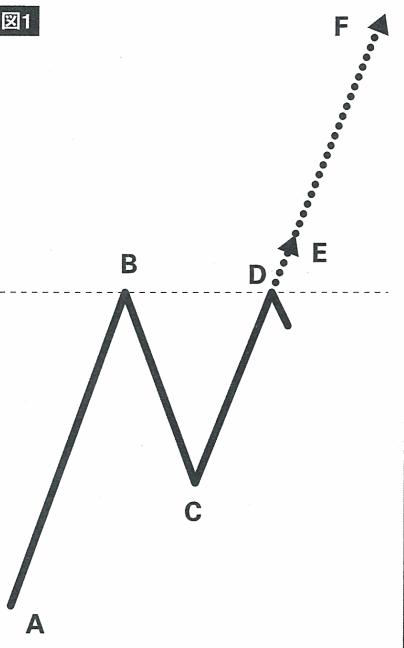
2つの野線の活用意義をしっかり理解する

今回は野線の活用意義について理解を深めていただきたいと思います。

何度か述べていますが私は野線の意義について次の2点が重要であると考えます。

- 1、直感的な相場感を養うため
- 2、初めに得た直感の確証を得るため

図1



現在一般的に理解されている一目均衡表は1、2が安易に混同されている事が問題です。実際のところ一目均衡表に限らず、単なる直感を売買決定の最大の理由にしている方が、多いのではないかと思います。

図1をご覧ください。

Bの高値を更新するDのポイントを買ひ場とする、という転換サインはよく知られております。

鍵足、新値足の転換サインがそうであります、この方法は「売るポイント」が見つかり、かつ「売ること」が出来るならば、絶対的に正しい手法と言えます。

Cからの変動ではBが天井であるかB Cが押しであるのかは確定的ではありませんが、Dを上抜くことでB Cが押しである事を証明しているからです。例えDを上抜いて、ごく僅かの伸びしかなくEから一気にCやAを割り込んでくるような変動であっても、Eで逃げられるものならば売買は失敗とはならないのです。これはむろん机上の考え方のことであって、一般的にはEからの急落に対し、Eで逃げられる保証などないのです。高値つかみで損失を被るということは多くの

方が経験されているのではないでしょうか。

高値、安値の切り上げは上げ相場、切り下げは下げ相場、とは観念の上では絶対的といえますが、Dで判断をくだすこと自体は的外れなことではありません。しかしDのポイントで初めて判断を下す人と、Bまでの変動であらかじめ直感を得ていた人では本質的に異なるのです。Bまでの変動であらかじめ直感的に判断をくだしていた人にとってはDを上抜くという表れ方は、直感の正しさを確かめる瞬間であり、そこに賭ける意義があるかどうかはあらかじめ整理がついているはずなのです。

Bまでの上昇が充分その余力を使い切ったものである、と捉えれば、Dを上抜いたのは綾に過ぎぬから買えない、との判断につながります。逆にBまでの上昇力が、まだその後の上昇に力を貸すものである、相場化してF以上の高値を目指すものであると捉えれば、Dを上抜いた瞬間こそ確かな買い場となるわけです。

一目均衡表の判断方法では特に結果に対する対処が重要となります。昔の相場師は野線自体の意味と、自分の判断についてはよく知っていました。

それ故に売買の失敗を自分の「相場の見誤り」として恥じ、「だまし」という言葉が使われたのであります。少なくとも「だまし」となった場合の対処、対応の準備なく売買がなされるべきではありません。

旭化成における確信買いできる局面とは

昨年何回か相場水準の基本数値での表れ方を説明してきました。

これは高値更新での上げと異なり、主觀的であろうとなからうと、もしもある値段が相場水準として働くならば、驚くほど適切に機能します。

またこれまで何度も述べてきた基本三波動Nの変遷のしかたも、上げ相場、下げ相場いずれの場合も必ずといってよいほどの表れ方をするのです。

経済変動総研配信の「株式レター」でとりあげた「旭化成」でこの二つを利用して確信のつくポイントが見られましたので紹介しましょう。

■1月28日配信した旭化成の分析

「昨年7月4日を起点と置いた相場水準は現在のところまだ生きておりまして、126日目1月5日高値、129日目(65+65-1)1月11日安値は1月14日配信コメントで述べたとおりです(1月5日はモミアイでの高値、14日はモミアイと同水準)。

133日目は1月17日安値で基準線に接しておりますのでやはり同水準とみなしでもよいでしょう。142日目は1月30日になりますが、この日は12月26日安値から22日目であります、11月28日安値から12月26日までの26日間に見合うものであります。11月28日から基本数値42、昨年9月5日高値から11月6日までも42日間

ですから、1月30日変化日の位置と、その後の変動は極めて大事といえるでしょう。

昨年11月高値803円を超えない、あるいは昨年12月26日のN T計算値808円程度から均衡表を割り込むようなら、再調整を余儀なくされる事にもつながります。月足で最安値から今月が51ヶ月目という基本数値もありますのでここから774円を割ってくることは決して良いことではありません」

既に放れとみなしたものの思うように上げていかないため逃げるべきポイントを示唆したのであります。実際の変動は1月30日に809円をつけ、いったん安値772円をつけたもの大きく上昇に転じました。実際の相場観としては完璧とは言いがたいものの、直感を確かめる過程

を経ていれば1月30日高値を上抜けば直ちに確信を持って買えるはずあります。

図2をご覧ください。

旭化成の変動は結果的に753円を相場水準としモミアイを演じる変動でしたが、いよいよ相場が放れるときには、必ず上げでも下げでも三波動構成を見せることになります。

その場合第二波動とみなすべき下落は7月4以前の大きな時間関係での下落部分か、あるいは11月28日安値までの下落部分しかありません。この時間関係では充分上昇時間を期待できることになりますが目先最重要といえるのは11月28日安値を起点とした三波動構成です。

従ってこの11月28日安値を起点とした三波動構成での変化日、計算値と7月4

日相場水準のモミアイとの比較をしますが、11月安値からの三波動でN T計算値808円からの下落では最大の時間をかけて11月安値から相場水準までの値幅分しか上げておらず、しかも7月4からの基本数値ですからモミアイでの高値を決定付ける可能性がありました。下落した場合はその下げ方にもよりますが最高値からの下げの三波動構成の影響を受けやすく、容易に調整を期待できないとの結論に至ります。

1月30日高値を直ちに上抜いたことで、その可能性を完全に否定し、逆にそれ以前の上げ相場の想定が生きてくることになりますから、私にとっては、このポイントは絶対的な買い場となります。

今後よりわかりやすい例があればその

都度ご紹介したいと思いますが、改めて均衡表グラフをご覧ください。

これは昨年8月からの旭化成日足均衡表であります。一般的に知られる均衡表の転換サインなるものがこの長期のモミアイにおいて売買決定としてはほとんど役に立たぬことがおわかりでしょう。しかしながら、実線と均衡表の交わる値段を一種の相場水準と置けばばいぶん違う結果となります。

繰り返しますが直感と売買決定は別であります。一目山人は直感と売買決定が一致するよう精進を重ねた人でありますが、意識的に研究、訓練を積まずに山人のようになれるはずはありません。ご研究ください。次回は近年一般化しつつある一目均衡表の誤った解釈について述べたいと思います。

図2

